

バッハと一緒に楽しみましょう(1)

美しい響きの日本語で歌う

橋本 眞行

東京バッハ合唱団でバッハを知り、バッハを歌い続けて31年、松山バッハ合唱団を組織して25年、バッハに係わった年数だけは、あまり引けをとらない歳になってきました。

私のバッハ遍歴は、誠に幸運にも大村先生と小林道夫先生のバッハからスタートし、若杉弘、ヘルムート・リリング、ヘルムート・ヴィンシャーマン、黒岩英臣、H.R.ドレンゲマン(マンハイム・コンコルディエン教会カントル)、P.ノイマン(ケルン室内合唱団指揮者・ケルン音楽大学教授)、H.M.ポイアーレ(フライブルクバッハ合唱団/管弦楽団音楽監督・フライブルク音楽大学教授)各氏のバッハ演奏に直接参加する機会を得ることによって幅を広げ、深さを体験することができました。

これらの方々との演奏経験は、音楽を専門として学ばなかった私にとっては貴重な現場での授業であり、何物にも替え難い宝物そして喜びとして私の心の中にあります。こんな経験ができた人間は世界中探しても他にはいないだろうと推測するに、自分がこの世の中で世界一幸運な人間であると断言できるといっても過言ではありません。

そして幸か不幸か、私は嬉しいことを自分ひとりの心の中に仕舞っておけない性格なので、ついついお節介にも「バッハはこんなに素晴らしいんだよ」とか、「難しいけれども、真面目にやれば心に訴えるバッハ演奏ができる」とか宣伝して回るのです。それを聞くほうは、私というフィルターを通してバッハの音楽や演奏家の人柄を知る訳ですから疑心暗鬼だけれども、最終的にはバッハを生涯の友とされる方が多いことから判断すると、あながちこのフィルターの存在も悪くはないのではないかと思います。

さてこのフィルターたる私は、この1年、再び日本語上演の現場に積極的に係わることになっていくつか感じることもあり、例の如く黙ってはいられない性質(たち)なので、いくつか書き記すことにしました。この稿で申し上げたいことは、『美しい響きの日本語で歌う』ということです。

東京バッハ合唱団は40年以上日本語でバッハを歌って、日本におけるバッハ普及に多大の貢献をし

てきました。それは専ら恵美子先生のご功績で、特に各方面で賞賛されているように、日本語として美しく品のある訳詞が素晴らしいのですが、それを歌う我々にその意識があるかどうか疑問に感じることがあります。歌詞の意味を理解して歌うことはもちろんですが、その歌詞の響きを、もう少し重要視すべきではないかと思うのです。

練習の中では、浅く薄っぺらな響きや、内にこもって意を尽くさない言葉が聴こえることがありますが、歌手としては言葉がどう響くべきかを常に意識しながら歌いたいものです。

バッハは礼拝を守る人のために、ありとあらゆる手段を用いて歌詞の内容を音楽に表現したのであり、大村先生は遅れて来る者のために、ぎりぎりと品格のある美しい日本語を紡がれたのです。こうしてカンタータにかけたお二人の崇高な精神によって曲が成り立っていることにより我々が日本語で歌える機会が与えられているのですから、こんな幸せなことは無いのではないのでしょうか。

我々がお二人の想いと精神を感じながら、また一語一語を慈しみながら歌うことにより、書かれた楽譜に命を吹き込むことができ、その結果として聴いてくださる方々が感動する歌になるのではないのでしょうか。

(松山バッハ合唱団主宰者・指揮者。東京バッハ合唱団では、今夏の世田谷中央教会、野尻湖神山教会の両特別演奏会において指揮の予定)

東京バッハ合唱団 特別演奏会

8月2日(土)18:00 開演、世田谷中央教会

8月9日(土)19:00 開演、野尻湖・神山教会

カンタータ BWV138、BWV139 より

ヴァイオリン独奏 BWV1004

カンタータ BWV26、BWV30 より

ピアノ 内山亜希、ヴァイオリン 小田幸子

指揮 大村恵美子(BWV138、139)、橋本眞行(BWV26、30)

いずれも入場無料

第 93 回定期演奏会(5月10日)を終えて

バッハとの出会い、バッハ合唱団との出会い

細川 芙美江(団員)

題名が長くてごめんなさい。こうなるわけは、深い理由があるのです。それには自己紹介からさせていただきます。入団してまだ日も浅いうえに、第 93 回定期演奏会の舞台を踏むなどした、厚顔無恥な女と思われることに傷つく繊細な(?)やもめですから。

亡くなった連れ合いが「バルト協会」や「ボンヘッファー研究会」という神学の研究会にいた時、わたしも夫の後にくっついて行っていました。大村先生が確かあのときは、出席しておられました。わたしは、ただのおばさんでしたから、会衆のうちの一として演奏会のチラシを下さったのだと思います。

会員は 50 名ほどで、この世界ではすごい先生がたがおられるなか、さささと、チラシを配っておられた姿を拝見したのが最初で、私も、この忙しい夫の下で“無給司書”をしていましたので、暇が無く、合唱団員になるなどとは思ってもよらないことでした。

ここ数年、教会のオルガニストを引き受けたり、専門の先生からバッハの作品やオルガンの手ほどきを受けていたので、バッハ愛好家の一人には入るでしょうか。

合唱経験といいますが、40 歳から 50 歳ころ女声合唱団の団員になっていまして、フォーレとか主にフランス、イギリスの傾向のもので歌っていました。その間にちょっとドイツものを手掛けたことも...、日本のものは超難しいものばかり、アルトのパートで頑張っていました。花粉アレルギー症なので鼻詰まりの期間が長く歌うのにテクニックが必要でした。

夫は難病と闘って 2000 年に亡くなりまして、夫の思いを残した日本聖書神学校になぜか、私が入学致しました。学校から歩いて数分の目白聖公会での練習の日ですが、出席できないのは夜間の神学校であるからなのです。わたしの学校も春休み中だったとき、中西碧さんに誘われて参加したのが入団のきっかけでした。

ステージ経験は何回もあります、ステージで 2 回も泣けてしまったのは初めてです。第 93 回定期演奏会の時です。

東京バッハ合唱団の行っていることはすごいことです。ますます精進して内にも外からもカウンタータに酔いしれたい(という言葉はバッハにはふさわしくない、感情移入は激しくなく弱くなくと聞き知ったことでもある)。

大村先生から 3 つの B (Bach, Barth, Bonhoeffer) の関係性をお聞かせくださることを楽しみにしてい

ます。

お休みが多いのはさぼりではありません。お許しください。

大好きなバッハを歌えることに感謝して 乾杯！

佐々木まり子様(アルト独唱)より

今回も盛りだくさんの充実したプログラムを、ご一緒させていただけて嬉しいひとときでした。とくに後半は客席のいちばん後ろの席で聴衆の一人として、本番の雰囲気を感じながら聴くことができ、貴重な経験をさせていただきました。

オケの音も合唱のトーンも柔らかく拡がりがあり、ソロもよく届いていました。最後のモテットは、つくりもしっかりして、音の充実感もあり、聴きごたえがありました。

小杉茂雄様(後援会員)より

昨夜はたいへんすばらしい演奏を堪能させていただきました、まことにありがとうございました。

各曲とも、曲の美しさと訳詩の美しさ、イントネーションとバッハの音楽との感動的な融合に、感激ひとしおでした。さらには合唱団のヴォリュームとバランス、響きの雄大さに圧倒されました。とくにモテットは最高でした。

演奏会ごとに、各パートの音楽性と音量のアップ、そしてバランスの向上が著しく感じられ、まことに嬉しいかぎりです。演奏者の皆様に深く敬意を表します。

アンケートより

- ・合唱に厚みがあって、とても良かった。
- ・日本語なので、合唱団の表情、声、ともによく表現できていたと思う。
- ・いつもながらのオーケストラの方々の腕達者な演奏、合唱の清澄なハーモニーや躍動感に満ちたリズム、豊かな表現は、以前にもまして感銘深いものがありました。
- ・せっかくの日本語なので、もっとはっきり歌っていただきたい。
- ・名曲揃いだ、曲が多すぎる。
- ・BWV30 のアルト・アリアは最高でした。後半のステージにアルトのソロがなかったのは残念。
- ・合唱の出番がもっとあれば、との思いが、最後のモテットで満たされてすばらしかった。

「報復」について

大村 恵美子

「報復するは我にあり」

5月3日の朝日新聞土曜版「ことばの旅人」で、「復讐するは我にあり」というタイトルの記事を見たとき、問題の大きさに比して、詰め甘さを大いに感じました。

これは、キリスト教の聖典である新旧約聖書を扱っているものなので、いずれどなたか専門の方が明解な反応を示して下さることが期待されますが、読者数の膨大な朝日新聞に載ったものを見て、単なる一読者が感じた素朴な感想を、私なりにまとめてみようと思うのです。

「正しい戦争」がある？

この記事に登場するのは、ひとりのアメリカ人、ノーマン・オルソン（56歳）という、民兵組織の指導者であり、銃砲店経営者であり、しかもバプティスト教会の牧師である、ミシガン州ペルストンの住民です。

民兵というのは、私たちには非合法の団体と思われるのですが、アメリカでは、現在でも憲法で認められているのだそうです。「規律ある民兵は、自由な国家の安全にとって必要であり、人民が武器を所有もしくは携帯する権利は、侵してはならない」ということで、オルソンがミシガン・ミリシアを創設したのは94年、29人から始めて、現在では1万人になっているそうです。

彼は、取材記者に、「聖書は『目には目を』とも言っているだろう……すべての人と平和に暮らすことができれば幸せだ、だが現実には、神から授かった子どもたちが傷つけられている。何もしていいの。それは、復讐ではなく正義なのだ」と言います。

字句通りの聖書受け入れ

聖書の言葉を、字句通り受けとめようとするれば、至るところで矛盾に陥ることは、周知の通りです。この記事の中でも、記者と相手とのやりとりで、聖書の言葉がかわされて、「でもこうも書いてあるではないか」と押し問答になるのですが、聖書を字句通り実行する態度は、キリスト教原理主義と言われるけれども、それだって自分たちの主張に合った箇所を選びとっているのです、100%字句通りということはありません。

旧約と新約の違い

非常に大まかな私の理解では、旧約聖書が信奉された古代イスラエルでは、民族を導く神が信仰された。それがやがて、その文化の中から立ち現れたイエスによって、イスラエル民族だけでなく、全人類を生かす神へと啓示された。そこが、旧約と新約とのいちばん大きな違いなのだと思います。

旧約聖書の申命記 32:35 では、神が「わたしが報復し、報いをする。彼らの足がよろめく時まで。彼らの災いの日は近い」と言うことになっているのに対し、イエスの弟子であるパウロは、「自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いています（ロマ書 12:19）。

「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。」（ロマ 12:21）

同害報復

「目には目を」という考え方（同害報復）は、古代の各地でひろまっていたもので、旧約聖書にも、はっきりと記してあります。

「あなたは憐れみをかけてはならない。命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足を報いなければならない。」（申命 19:21）

「あなたが彼ら〔先住民〕を撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない。……〔そうしないと〕主はあなたを速やかに滅ぼされるからである。」（申命 7:2-4）

そんなふうにはイスラエル民族を他の人間の中から選び分かって、「あなたの神、主はあなたをよい土地に導き入れようとしておられる。」（申命 7:8）

現在のユダヤ教が、このような聖書の内容を、どのように解釈しているのか、私にはわかりませんが、この通りに信じているのだとしたら、もちろん先住民たるパレスチナ人は、「滅ぼし尽くさなければならない」相手であるはずで。

イエスの「太陽政策」

これではとても共存できるような信仰ではありえないでしょう。それに対して、イエスは、聖書ではこう命じられている、「しかし」と言って、従来の掟をくつがえすような教えを説くのです。これこそが、ローカルな神から普遍的な神への転換だったのです。

新約聖書マタイ福音書の、イエスの言葉を引いて見ますと「『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。」（マタイ 5:38）



「スノードロップ」 写真：千葉光雄（団員）

「『敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。〔天の〕父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」(マタイ 5:44)

これが現在よく使われる「太陽政策」の本来の意味なので、イソップの「北風と太陽」との2つの方法の対比もさることながら、相手をやっつける自分とはそもそも何者なのだ、このように公平な神に、相手と全く同等に守られ支えられている存在なのではないか、という強い反省があるべきなのだと思います。

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。」(マタイ 7:1)「あなた方の一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」(マタイ 18:35)

朝日の記事の中では、メノナイトという宗派の人たちが重んじている次のようなイエスの言葉も引いています。「『兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。7回までですか。』イエスは言われた。『あなたに言うておく、7回どころか7の70倍までも赦しなさい。』」(マタイ 18:22)

イエスの神も「戦闘者」?

ところで、アメリカ政府の対イラク強硬路線を支持した人のホームページを紹介して、「大義なき戦争を起こしてきたのはイラクのほうだ。宗教者は、悪の問題をあまりに考えなさすぎる」「神は戦闘者でもあった」として、次のイエスの言葉の引用もせています。

「私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからで

ある。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。」(マタイ 10:34)。しかしここにある「剣」が、具体的な武器ではなく譬喩であること位は明らかで、イエスが言っていることは、イスラエルの民族宗教であるものを世界の普遍宗教に変えるためには、妥協があってはならず、既成のあらゆるものにぶつかることになる、そのために、自分や家族や民族の小さいエゴを脱しなければならぬ、という覚悟のことなのです。「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのため〔つまり普遍的な価値のため〕に命を失う者は、かえってそれを得るのである。」(マタイ 10:39)

いまもイエスを殺すクリスチャンたち

こういうことがわからない当時のユダヤ人によって、イエスは受け入れられずに殺されたのですが、いまのアメリカのこの牧師のような人々も、イエスを殺しているのではないのでしょうか。

自分のひいきにする言葉を、聖書から抜き出してきて、お互いにぶつけ合うことから、何の実も結ばないので、私は、このような聖書論議の場合には、いつもイエス自身が要約してくれた2つの物差しにだけたよって、問題を整理することにしています。

「イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」(マタイ 22:37)

「殺すなかれ」が愛の基本

朝日では、聖書解釈を、次のように結論づけています。

「野本真也同志社大学教授(聖書学)は『時代が下ると、おおむね厳しい掟から愛の宗教へと変化している。矛盾に悩むよりも、生きるための知恵が詰まった書物と考えたほうがいい』と言う。」

これでは何か、突き放したような、敢えて低次元にまとめたような感じがしますが、人間はいつでも相手を自分にしたがえようとする存在であり、それを自分できびしく警戒して、どんなことがあっても、とにかくまずは人間を殺さないことに徹しよう、「殺すなかれ」一点だけにでも聖書に従うことだ、と決意しているのです。

理屈はそのあとから、自己弁護のために出てくる卑しいものでしかありません。

(『報復戦争に反対する会・じむきよく通信』6月1日号より、一部割愛して転載)